

## ウディネ大学に滞在して 「知覚研究のプロトコル」を実践する

明星大学人文学部心理学科教授

**境 敦史** (さかい あつし)

私は今、所属大学の特別研究員として、北イタリアの街、ウディネに滞在しています。私が当地を訪れたのは、故カニツァ (G. Kanizsa) 先生の高弟であり、パドヴァ大学で長く教授を務められた後、ウディネ大学に移られ、現在は名誉教授であられる、ヴィカリオ (G. B. Vicario) 先生とともに、事象の視知覚・聴知覚について研究を行うためです。

私が先生と初めてお会いしたのは、1996年にパドヴァ大学で国際精神物理学会が開催された折でした。その数年前、私の師がパドヴァでサバティカルを過ごされた縁で、師とともに先生のオフィスに招かれ、互いの主張を絵で説明しながらの議論に時を忘れました。2004年に単身当地を訪問し、私の研究にコメントを頂いて以来、ヨーロッパでの学会の帰途など折をみて仲間とともに当地を訪れ、意見交換を重ねてきました。

私がヴィカリオ先生の下で学びたいと考えたのは、先生の研究テーマが私にとって興味深いことはもちろんですが、先生が「知覚の心理学のあり方」に度々言及しておられるからです。知覚について

考察すると、「知覚とは、誰が、どこで、どうすることか」という問いに突き当たります。それはつまり、知覚をどのように定義するかという問いです。この問いに答えることを避けて知覚を研究することはできないと私には思われるのですが、例えば「知覚とは、人間が、環境において、事象を知ることである」とする立場や、「知覚とは、脳が、環境から与えられる情報を処理することである」とする立場など、多くの研究者は、無自覚的にならなくても、さまざまに暫定的な定義を行っているのではないのでしょうか。

そして、知覚をどのように定義するかという問いは、(当然ながら)心理学の立場から知覚研究をどのようなやり方で進めていくか、という方法論の問題に行き当たります。先生の研究や論文には、顕在的ではなくとも、この問いに対する答えが示されているように思われます。「顕在的ではない」というのは、先生が哲学的議論よりも実証に重点を置いておられるがゆえです。

とくに、「実験現象学と知覚の科学」と題する、先生の2008年の論文に収められた「知覚研究のプロトコル」には、心理学というアイデンティティに立ったうえで、知覚研究を具体的に進めていく手順が、① 現象観察と綿密な記述、② 現象を特定する変数の試行的操作、③ 熟練した観察者との議論を経た変数の決定、④ 未経験の観察者を対象とした実験、⑤ 実験結果である記述の分



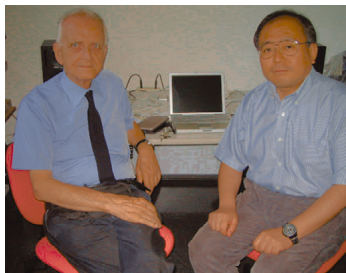
### Profile — 境 敦史

1996年、慶應義塾大学社会学研究科博士課程修了(心理学)。名古屋造形芸術大学(現名古屋造形大学)助教授、明星大学人文学部助教授を経て、2005年より現職。専門は実験心理学(知覚)。著書は、『ギブソン心理学の核心』(共著、勁草書房)、『直接知覚論の根拠：ギブソン心理学論集』(共訳、勁草書房)など。

析からの、キーとなる記述語の選定、⑥ それらに基づいた実験計画の策定と実施、結果の統計的分析、⑦ 実験後の観察者からの聴き取りによる、実験者が想定していなかった現象特徴の理解、という7段階の過程として示されており、当地での私たちの研究もこの手順に則っています。

「現象観察と綿密な記述」を旨とするアプローチに対しては、「主観的な感想をただ羅列しているにすぎない」とか、「哲学における現象学の考え方をそのまま心理現象に適用している」といった指摘があるかもしれませんが、それらが誤解であることは、前述の「知覚研究のプロトコル」を御覧いただければ明らかでしょう。

私はこれまで、当学会のワークショップにおいて、仲間とともに、知覚研究において記述を旨とするアプローチの意義と可能性について考察してきましたが、このたびの留学を、今後さらに議論や考察を深めていく契機にできればと考えています。



ウディネ大学の研究室にて、  
ヴィカリオ教授とともに